



目次

「いま、あなたに届けたい法話Ⅲ」

共通テーマ

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

真宗を戴いて展かれた世界

アソカ幼稚園教頭

鶴見美智子

…
2

真理の一言に出遇う

修練道場長

相馬 豊

…
11

わたしを立ち止まらせるもの

大谷中学高等学校講師

乾 文雄

…
16

亡き人を案ずる私が亡き人から案ぜられている

奥羽教区蓮心寺坊守

本間 幸恵

…
24

たましいの回復

大谷大学准教授

マイケル コンウェイ…

32

すでに、開かれてあり

金沢教区常讃寺副住職

藤場 芳子

…
39

動画・本冊子のPDFデータの掲載ページ

しんらん交流館ホームページ（浄土真宗ドットインフォ）

「いま、あなたに届けたい法話」 https://jodo-shinshu.info/ima_howa/





真宗を戴^{いた}いて展^{ひら}かれた世界

法話の動画はこちら↓



アソカ幼稚園教頭 鶴見^{つるみ} 美智子^{みちこ}

私が思ってもみななかった言葉や生き方

私は今から四十数年前、全国の真宗寺院が関わる幼児施設の保育者を対象にした、真宗保育研修会に参加し、そこから真宗を知ることになりました。これから、私がどう真宗を戴いてきたかをお話したいと思います。

初めて研修で聞いた二つの事柄に、私は衝撃を覚えました。一つには、真宗とは一宗一派の名のりではない、真実を宗とする教え。そして真実とは、時代や国を超えて通用することと聞きました。それまでも、真実という言葉はたくさん見聞きしてきましたが、その見極め方がわからなかったので、大切なことはそこから考えればいいんだ、と大きな安心感を覚えました。また、どの時代、どの国の人にも通用することといったら、いのちとか生きることしか私には考えられなかったもので、他にどん



なことがあるのだろうかと知りたいと興味を覚えました。

また、二つ目には、『仏説阿弥陀經』の中に「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光」

（『真宗聖典』一二六頁）とあり、それは一人ひとりの存在、あなたはあなたでいいということ。いのちとはそういうことだと聞いたのです。いつも、人との比較で育ってきた私は、「え？ そのままの私でいいの？」と半信半疑ながらも嬉しかったことを覚えています。こうした真宗保育との出会いでしたが、その後も私が思ってもみなかった言葉や、生き方にたくさん出遇わせていただきました。

ある全国大会の折に、保育協会の研究部長だった祖父江文宏先生が、次のような話をされました。祖父江先生は、知多半島にある児童養護施設の園長です。園長として初めて赴任した時の話でした。施設の門の前に、数人の中学生がいて、「おまえが今度この園長になるのか」と声をかけてきました。それをきっかけに、子どもが差し出すブドウを食べながら雑談したそうです。途中、「もっとブドウを食べるか」と聞かれ、先生が頷くと、一人の子どもが席を立てどこかへ行きました。そして、その子が帰ってきた後ろには、農家の人がいて「お前がこの園長か、この学園は泥棒を教えるのか」と怒っていたということです。

この話を聞きながら、私だったらどうするかを考えていました。子どもに試されているから下手な

ことは言えない。でも、自分は今、来たばかりだから、全く事情を知らなかった、と自分の釈明もしたい。また、どんなに謝っても農家の方は怒って、何を言われるかわからない。そんなことも怖い。と私の答えが出ない中、先生が言われたのは「謝るしかないから謝った、ただ謝った」でした。

そして農家の方が帰った後、「食べてしまったのは返せないから、これからどうしようか」とみんなで相談して、「季節ごとに、ブドウの手入れを手伝わせてもらう」ことにしたそうです。そうして三年が過ぎた頃、その農家から「みんなのおやつにしてください」とたくさんのブドウが届くようになったという話でした。言い訳をしなくても、こんな大きな世界が開かれるんだ、と私はびっくりしました。事が起きると、すぐに言い訳を用意しなくなってしまうですが、その時私は、言い訳をしないう生き方をしようと心に決めました。

また、ある時の部会で、なぜか園長先生のグループに入れられていました。そこでの話は、内容も理解できずに、ただそこにいただけという状態でした。会議終了後、事務局の方が私に、交通費を渡そうとされたので、「なんの発言もできなかったから、とても交通費などいただけない」と辞退したところ、「無用の用」ということがあると言われました。役に立たなければだめ、役に立ってこそ価値があると育ってきた私には、理解し難い言葉でしたが、交通費はありがたくいただきました。



帰りの新幹線の中で、この言葉が頭から離れなかったのですが、ふと、「私は今まで、自分の発言は役に立っていると思っていたのだ」と気づき、急に恥ずかしさを感じました。今回、何の仕事もしなかった私が、交通費をいただき、それで自分の恥ずかしさを知ったわけですが、これは一体どういうことなのだろうかと思うのです。自分の常識では、とても割り切れない経験でした。

「いのち」と「自分」の二重構造

ある時講師の先生から、一人のいのちには四十五億年の歴史があると聞きました。その時、私ってすごいと単純に感動しました。と同時に、感動している自分にも驚いていました。なぜかといえば、花まつりの行事で「天にも地にも我ただひとりとして尊し」、「あなたはかけがえのない存在ですよ」と何十年も聞いていますが、私ってすごいと感動したことは一度もないのです。同じ自分のことなのに、不思議に思うところです。

それを考えてみると、人はいのちで生まれ、それぞれの家庭でつけてもらった「何々ちゃん」という名前を自分として生きていく。いのちと自分は一つのもんと思ってしまうですが、本当はいのちと自分の二重構造なのだと感じます。「いのち」は「自己」、「存在そのもの」、「無量寿」、「阿弥陀」。そ

して「自分」は、「自我」、「こころ」、「エゴ」と言い換えられるかと思います。「いのち」は、絶対自由、絶対平等、絶対平和の世界から生まれているので、それを願って生きている。「いのち」は、「天上天下唯我独尊」であることにゆるぎません。ところが「自分」は、それぞれの家庭や時代の価値観で育ちます。そしてこころは、環境に反応するので、常に揺れ動き、さまざまな悩みや苦しみに出会うことになるのです。

六道ろくじょうを生きている私

この自分を苦しめる原因を、仏教では煩惱と押さえ、その代表が六道です。人のこころを迷わす六つの道です。

六道の一つ目、「地獄」は自分を絶対化する、自分勝手。二つ目の「餓鬼がき」は、貪むさぼる心、どんなに持っていたても満足できない。三つ目の「畜生ちくじょう」は、誰かを当てにする。自立できない、責任を取らない、事実を事実として認められない。四つ目の「修羅しゅら」は、自分が気に入るか気に入らないかで喧嘩になる。五つ目の「人にん」は、善悪など二つに分けて考える。分断、排除、ひき裂かれる世界をつくる。六つ目の「天」は、満ち足りた世界。悦びに溢れた世界ですが、慣れると悦びも感じなくなり退



屈する。そしてまたあちこちをめぐることになるそうです。この六道から一步出ると、自分のかけがえのなさに気づくということなのです。

私が、花まつりの話を聞いても何の感動もなかったのは、六道をめぐるっている証拠だったようです。自分では結構、まともに生きていると思っていたのに何十年も六道をぐるぐるめぐっていたのかと思うと、ちょっと情けなく感じます。そしてせっかく生まれてきたのですから、一歩踏み出したいと思うのです。

その方法としては、六道をめぐるっていたことを反省して、それを辞めていい人になっていくことだと私は考えました。ところが、反省はその時の気分だから当てにならない。また、いい人になったという思いが人を見下すようになる。だから、六道を生きていることを自覚することだけ、と聞きました。自覚した結果や成果を知りたいと思ってしまうますが、それも六道の道のようにです。

いのちはいのちのもの

ある時、プロテスタントの幼稚園の園長先生が、「真宗は自虐的だね」と言われたことがあります。神学校でも、真宗のことを少し勉強したそうです。私には自虐という言葉がピンとこなかったので、

国語辞典をひいてみると、「自分で自分を責めさいなむこと」とありました。たしかに、六道を自分に当てはめると、どれもこれもぴったりします。善いか悪いかといえば悪いところばかりです。でも、善い悪い、優劣など、なんでも二つに分けて考えること自体が間違っていると聞きますから、真宗では、どんな自分を見ても自分を責めることにはなっていないのです。

「真宗は、自覚の宗教」と言われることがよくわかります。あらためて考えてみると、真宗に出遇うまでは、誰からも「いのち」について教えてもらっていなかったことに気づきました。自分の存在にかけがえのなさを感じ取れたら、どんなにかこころ安らかに、生きていかれるかと思うのです。そうした学びのおかげで、幼稚園では、「いのちを課題にすることを、保育の柱」にしました。

子どもたちは生き物が大好きですから、いのちの話にとっても関心があります。ある時、いのちは誰のものかをみんなで考えました。子どもたちは即座に「自分のもの」と答えました。「どこで買ったの？ どうやって作ったの？」と聞くと困って、次に「お父さんとお母さんのもの」と元気に答えました。「お父さんとお母さんのものなら、あなたのいのちをお父さんとお母さんが勝手にしてもいいの？」と聞くと、「だめ！」と大きな声が返ってきました。そして、また考えた末、「神さまのもの、仏さまのもの」とちよつと自信ありげに言いました。子どもたちはちよつと難しいことになる



さまや仏さまを引き合いに出すので、「へえ、どんな神さまなの？ 仏さまからどうやってもらったの？」と聞くと、また静かになって考え始めました。そして、ひとりの子が、「いのちはいのちのもの」とぼつんと言いました。実は、私の中で答えがあったわけではなかったのでびっくりしました。「いのち」は「いのちのもの」、と私はその子から教わりました。

南無阿弥陀仏はありがとう、そしてごめんなさい

私は真宗に出遇えてよかったとつくづく思うのですが、呪文のような南無阿弥陀仏については、長い間、馴染めませんでした。南無は帰依するとか、頭が下がると聞きますが、御本尊の阿弥陀さまがわからないのですから、頭の下がりようもないのです。

また、阿弥陀さまから願われているとか、阿弥陀ははたらき、はたらきとしての仏さまと聞いても頭の中は真っ白になるばかりでした。そんなところをうろろしている私に、ある先生が、自分流に言えば「南無阿弥陀仏はありがとう、そしてごめんなさいだ」と言われました。

六道を生きるしかない自我、それに対していのちは天上天下唯我独尊の存在を生きよと願い続けてくれているということなのでしょう。日頃私たちは、いのちがなくならないように、死なないように



と心配しますが、それより前にいのちの方が私たちを心配してくれていたのです。だから、南無阿弥陀仏、ありがとうございます。ごめんなさいです。恩徳讃の和讃が私の中にずっと落ちました。

南無阿弥陀仏



真理の一言に出会う

いちごんであ

法話の動画はこちら↓



金沢教区道因寺住職・修練道場長

相馬 豊

「コロナ禍」という言葉

新型コロナウイルス感染症がまん延し、私たちの生活も新しい生活様式に基づいて、さまざまな自粛、あるいは制約を受けながら日々の生活をしております。その生活の中で、あらためて今私たちは、「マスクコミュニケーション時代」の中を生きていると思います。マスクをつけて人に会い、人と向き合う、なかなかこれはつらいことです。相手の表情を伺い知ることができない。だからこそ、言葉を尽くし丁寧に語り、聞くということが大切だと実感しております。

そういう状況の中で、よく見聞きするのが、「コロナ禍」という言葉です。「禍」は「わざわい」と読みます。どうして新型コロナウイルス感染症が「わざわい」になるのでしょうか。私たちは、いつでもどこで何が起こるかわからない、そういう状況の中に生きています。例えば、自然災害、事故、病

気、そして人と人との関係、「わざわい」になる要因は身近なところに数多くあるのです。しかしなぜ、新型コロナウイルスを「わざわい」と、私たちはそういう言い方をするのでしょうか。どうも「コロナ禍」という言葉には私たちの日常の有り様が深く関わっているように思います。

例えば、台風の季節に、台風の進路が身近なところに来ると予報された時、私たちは進路が変わってくれればいいと思います。その進路に当たった人たちの思いや、備えに対しては何も考えることをしなくなります。そして出るのが、「やれやれ、ほっとした」という言葉です。

つまり私たちは、常に問題を外に見て他人事のように眺めている。そういう生活をしているのです。

しかし、その身近な私たちの生活に、特に私や家族に及ぼす危険な出来事が身近に迫った時、その時私たちは慌て出します。自分ではどうすることもできない出来事に出遭った。その時初めて、自分に問題が見えて来る。新型コロナウイルス感染症の場合は「いのち」に関わることです、それも私や家族を含め、多くの人たちの「いのち」に目を向けさせます。そして、生活基盤、家庭経済の崩壊。そういうことに私たちは恐れをなします。その恐れを、私たちは平生見ることはできないし、語ることもできません。



ところが今回のように新型コロナウイルス感染症が拡大した時、自らの内にある恐れ、疑いの心が表面にあらわに出て参ります。また、その疑う心というのは、何を生み出すかといえ、もし感染したという疑い、そして疑いが今度は恐れに変わっていく。また恐れは、不安を呼び起こしていきます。

そういう私の内面にある疑う心、恐れ、心が次から次へと私に覆い被ってきます。また別の見方をすれば、私たちは人と人との関係性の中を生きています。そのつながりが、今回の新型コロナウイルス感染症によって、ズタズタに引き裂かれています。他者のことは気になるが、自分が問題にならない。自分のことばかりに目を向けて、他者の存在が見失われている。人と人とのつながり、関係性を生きていながら、その関係性がいつの間にか崩れていく。そこにこそ大きな問題があります。自分さえ良ければ、という私の思いによって、社会全体が濁ってしまう。新型コロナウイルス感染症は私たちに問いかけているのです。あなたは人と人とのつながり、関係性をどう生きていくのですかと。一旦壊れた関係を取り戻すには、長い時間がかかりますよ。あらためて、そういう大きな問題が、コロナ禍という言葉の中に込められていると思います。

吉凶禍福に振り回される心

『仏説無量寿經』（『大經』）に「吉凶禍福、競いておのおのこれを作す。一も怪しむものなきなり」（『真宗聖典』六一頁）という言葉が説かれています。この吉凶禍福というのは、生活条件のことであり、私たちが言うならば、経済的で豊かな幸せを追い求め続けていく時、「吉・福」というものに目が向かいます。そして、経済的で豊かな幸せを阻害するもの、妨げるもの、「凶・禍」からは目を逸らします。この、吉凶禍福に私たちの生活そのものが振り回されて、幸せになるとか不幸になるとか、この吉凶禍福に振り回されながら日々の生活を送っている私の姿があります。

また吉凶禍福に振り回される心には「善・悪」があります。新型コロナウイルス感染症がなければとか。新型コロナウイルス感染症によってとか、新型コロナウイルス感染症のせいにして、自分の都合で生きています。そのことを、「一も怪しむものなきなり」と押さえられているのではないのでしょうか。その私たちの有り様、そこにこそもう一度たずねていかなければならない視点があると思います。しかし、その状況の中に生きている私が問題にならないのです。常に状況だけを気にし、そこに生きている「私とは一体何か」をたずねることがないのでしょう。人間の眼からこの時代を見れば、最も嫌なものとして映り見えてくるでしょう。



私が歩み出す方向

では、逆に時代から人間を見た時、どういうふうになにに問いかけていますでしょうか。疑い、恐れを抱きながら、身が小さくなって生きているのではないのでしょうか。いきいきと生きることができない、生きづらい中を生きている。だからこそ、時代は私たちに、私に、「あなたは人間としてどう生きるのですか、どのような生き方をしますか」と問いかけます。

その問いに答えるならば、そこには、教えの言葉と真向きになり、聞きたずねていく必要があります。

真理の一言は悪業を転じて善業と成す

（『教行信証』『真宗聖典』一九九頁）

都合の悪い出来事が真実の言葉、仏の教えに照らし出された時、私が歩み出す方向が指し示されます。「道標」^{みちしるべ}です。その道標によって、今、まさに「コロナ禍」の時代、社会の中を生きあぐねている私に「南無阿弥陀 人と生まれたことの意味をたずねていこう」と呼びかけ続けられていると言えます。ありがとうございました。

南無阿弥陀仏

わたしを立ち止まらせるもの

法話の動画はこちら↓



大谷中学高等学校講師

乾 いぬい
文雄 ふみお



「それでいいのか」という問い

滋賀県にあります小さなお寺の住職をしながら、京都にあります大谷中学高等学校において、十二歳から十八歳という若い人たちと共に宗教、特に仏教、その中でも、親鸞聖人が顕らかにされた本願念仏の教えに学んでおります。

二〇二三年に勤まります、宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要のテーマ「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」。このテーマを耳にした時に、思い出したことがあります。

今から十五年ぐらい前のことですが、学校で高校生の担任をしていました。クラスの生徒たちとなかなか思いが通じ合わなくて、しんどいなあという思いをしていた頃のことです。と言っても、思い



わたしを立ち止まらせるもの

が通じないというその原因は、自分の思いに合ったやり方を単に押しつけようとしていたことにあったというのは、ずっと後になってわかってくるのですけれど。一生懸命に仕事をしているのに通じない、報われない、またはやるせないという、そういった思いのもと、しんどいなあ、仕事がおもしろくないなあ、そんなことを感じながら愚痴をこぼしていた、そんな日々のことです。

その日は久しぶりに家に早く帰れたものですから、幼稚園に通っていた息子と一緒に風呂に入ろうかとなりました。お風呂に入ってもため息ばかりついていたのでしようね。息子がそんな私を見て、「お父ちゃん、疲れてんの？ 仕事大変なん？ そや、歌、歌ってあげるわ」こう言って、ある歌を歌ってくれました。その歌は、

なんのために生まれて なにをして生きるのか

こたえられないなんて そんなのはいやだ！

という皆さんよくご存じだと思うのですが、『アンパンマンのマーチ』でした。

それまで何度も耳にしたことはありませんでした。でもそこに歌われている歌詞の意味は、私の中にはそれほど響いてはきていませんでした。ところが、自分の中にあるわだかまりとか引っかけりとか、思いどおりにいかないというところでぐじぐじと言っている、そういう自分の心の内をズバリと言い当

てられたような、そういうふうに関こえたものですから、「やめてくれ」、「今そんな歌は聞きたくない」と力なく呟いたのを覚えております。そんな私に気づくことなく、息子は意気揚々と一番を歌いあげた後に「次は二番!」と言ってつづきを歌ってくれました。

なにが君のしあわせ　なにをしてよろこぶ

わからないままおわる　そんなのはいやだ!

二番を最後まで見事に歌い切った息子は、「どや!」といわんばかりの笑顔で「元気でたか?」と私に聞いてきました。その質問にどう答えたかというのはもう覚えていないのですが、これは身にこたえました。

機が熟すということ

ここに歌われていたのは、私が私として生まれたことの意味を知り、私であることを喜んで生きるということがどうやったら実現していくのか。そして、そういう問いに対して、そんなこともわからずに一生を終えていく、それでいいのかと、あらためて問いかけているわけです。そして最後に、「そんなのはいやだ」と心の叫びがその歌を締めくくっています。どんな教えであれ、大切な言葉で



あれ、機が熟すということが本当に大事なのだと、そんなことを思い知らされました。

「そつたくじょう啐啄同時」という言葉が思い出されます。啐啄同時というのは、卵から出ようとする雛ひなの声と、

母鳥が外から殻からをつつくそのタイミングがぴたと合うことで「いのち」が生まれるように、学ぶ者と教える者の機が合うこと。そういう意味の言葉です。ですからここで機が熟すというのは、何度も何度も耳にしていた歌のはずなのに、「かわいいなあ、楽しいなあ」ぐらいにしか感じていなかったその歌詞が、思いどおりにはならないというところで、悩んでいた私に対して、とても重い意味をもつ言葉として訴えてきたということです。まさに内からのささやきと外から殻をつつくような、そのタイミングがぴたと我が家のお風呂場で一致したと、そう思えるわけです。そしてそのアンパンマンの歌から、あなたは一体何を大事なことで、何にしがみついて生きているのですか、本当に今のままでいいのですかと、そんな新たな問いを与えられたわけです。

お念仏のはたらき

私たちは幸せになりたい、自分らしくありたいと願うものです。ともすると、そういったことを願えば願うほど自分の思いを実現させたい、そのためには努力を惜しまない、それが正しい道である。

そのように考えてしまいます。もちろん、こうありたいと目標をもつことも、手を抜いてはいけな
いと努力を惜しまず頑張ることも大事なことです。間違っ
てはいけません。

しかし、その自分が実現させたいと願っている思い、その私の思いそのものに疑問をもたせ、また弱
音を吐いてはだめだ、もっと頑張らないとだめだと、がむしゃらになっている努力の方向性といいま
すか、こだわっているものに、本当にこれでいいのだろうか、疑問をもたせて一旦立ち止まらせる、そ
ういったものがあります。それが慶讃のテーマになっている「人と生まれたことの意味をたずねていこう」
という言葉に先んじてある、「南無阿弥陀仏」というお念仏のはたらきなのではないかと思うわけです。

何を蓄えるのか

私が身を置いています京都の大谷という学校では、今年もお正月の法要、修正会が勤まりました。
その席で校長の飯山等先生が、次のようなお話をしてくださいました。京都の染織家の、志村ふくみ
さんという方がおられます。このお話は中学校の国語の教科書にも出てくるそうですが、その志村さ
んはある時、日本を代表する花である桜のあの鮮やかな花の色に糸を染めて、それで着物を作りたい
と願われたそうです。



春になると花びらを集めてそれを煮詰めて、桜の色を出そうと何度も何度も繰り返されるのですが、なかなかうまくいきません。ある時ふと、花びらではなく桜の木の皮を煮詰められました。そうすると見事な桜の色がそこに現れたといえます。後々わかってくることだそうですが、その桜の木の皮は厳しい冬の寒さを耐えて、桜の花が咲く直前のものでないとだめだそうです。

つまり厳しい中でじっと堪えて蓄えられていたものが、表に出てきたということなのだそうです。桜の木が花に色を持たせるために、じっと耐えて蓄えて、まさに機が熟した時に表に出てくるのが、あの見事な桜色だということです。そして、校長先生は、その場に集った皆さんにお話の締めくくりとして、こう尋ねられました。「皆さんはこの大谷という場で、何を蓄えていかれますか」と。

思えば私たちがいざとなった時に、口に出てくる言葉や振る舞いといったものは、それまで自分の中に蓄えられたものが表に出てきただけなのかもしれません。コロナという時代にあって、平気で人を傷つけるような言葉が出てしまったり、または相手を思いやる優しい言葉や振る舞いが表に出てくる。そういったものは共に、私が長い年月をかけて経験を積み重ねて蓄えてきたものが表に出てきているのかもしれない。

ここで大きな問題があります。自然というあるがままの営みの中で、桜の木は一生懸命に蓄えるもの

があります。それに対して私の思いという我執の中で、本当に大切なことに暗いままため込んでいく、そういう人間のため込むものと、自然の中で蓄えられていくものには大きな違いがあるということです。『ダンマパダ』（『法句経』）といわれる古い經典の中に、次のような言葉があります。

修行僧よ。この舟から水を汲みだせ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであろう。【以下略】
（中村元訳『ブッダの真理のことば感興のことば』岩波文庫六二頁）

この舟を「自己・自分」として、水を「私の思い」とした時、我執に満ちた思いという水でいっぱいになった舟が沈みそうになっているのに、それでもなお、これでもかこれでもかと一生懸命漕いでいる私がいるということです。まさに自分の思いを実現させたい、そのためには努力は惜しまない、それこそが正しい道であると。そういう道を信じては、うまく前に進むことができず、もがき苦しんでは行き詰まっている状態を指しているのではないのでしょうか。

繰り返しになりますけれども、願いをもつことも努力を続けることも大切なことです。しかし、もし今、自分が信じて疑わない生き方に行き詰まりを感じて、溺れそうになっているとしたら、南無阿彌陀仏というお念仏は、今まさに私がそういう状態にあるということを気づかせ、ため込んだ我執の水、自分の勝手な思いに縛られた水、それを外に汲み出すという新たな方向性を与えてくれるものな



わたしを立ち止まらせるもの

のではないのでしょうか。私たちは溺れそうになっても、そのことにすら気づかない自分がいたりするものです。自分の力ではなかなか気づくことができない。それが自分という存在です。

だからこそ校長先生は、「あなたはここ、大谷という学びの場で一体何を蓄えていかれますか」とお聞きになったのだと思うのです。今あなたが自分に付け足し、蓄えようとしているものは本当にそれでいいのですかと。

念仏に出遇うということ

これも大事な先生に教わったことですが、「正」という字があります。本来の漢字の解釈からは逸れるのですが、正という字は「一」に「止」を足して「正」という字になります。ですから、これでいいのだと思っていたこれまでの自分の在り方に疑問を抱かせ、一旦立ち止まらせるものがある。ああ、またわかったつもりで生きていたと。そういう大切な気づきを与えてくださるもの。念仏によって正され、そして次の確かな一歩を踏み出す。そういうことがやっと身の上に成り立つ。お念仏に出遇うということとはそういうことではないかと、このようにいただいております。どうもありがとうございました。

南無阿弥陀仏



亡き人を案ずる私が 亡き人から案ぜられている

法話の動画はこちら↓



奥羽教区蓮心寺坊守 本間 幸恵
ほんま ゆきえ

時代を超えて

私たちの宗派の本山は、京都の真宗本願東本願寺です。その境内に参拝接待所という場所があります。そして、その参拝接待所の広い仏間に掲げられてあるのが、この「亡き人を案ずる私が 亡き人から案ぜられている」という言葉です。

東本願寺にお参りなさる方たちの中でも、亡くなられた身内の方のお骨を分骨して、それを東本願寺に収めたいという方が大勢おられます。そのような方たちの、受付や応対をしているのが参拝接待所です。京都の本山で、亡くなられた身内のお骨を収めようとなさるのは、「亡き人を案ずる」という思いがあるからでしょう。そのことについて、もう一つ考えてもらいたいことがあります。それは、「亡き人を案じているあなたは、亡き人から案ぜられているあなたなのですよ」ということなの



です。その言葉が呼びかけているのは、東本願寺にお骨を収めようとしている方だけでなく、身内の誰かと死に別れるという悲しい経験をした全ての方に対して、呼びかけている言葉です。

さて、亡き人を案ずるということは、いろいろな思いがあるかと思っています。悲しい思い、懐かしい思い、何かわだかまりを感じる思い、思い出したくもないということもあるかもしれませんし、あるいは、すまなかったなあと思われる方もあるかもしれません。こう思わなければならないような、模範のようなことがあるわけではありません。お一人お一人のその思いが、亡き人と私をつないでいる大切な絆です。

では、私が亡き人から案ぜられているというのは、どういうことなのでしょう。そもそも亡き人はどういう存在になって、どんな所にいて、どんなことを案じてくださっているのでしょうか。

私は、青森市にあるお寺で生活をしています。ある時用事があって、タクシーで出かけた時、車内でかかっていたラジオの番組で、パーソナリティの女性がこんなお話をしていました。その放送局で、スタッフの人たちが休憩時間に一服をしていた時のことです。放送局にアルバイトに来ていた若い娘さんに頼んで、近所のお菓子屋さんからケーキを買ってきてもらいました。休憩室のテーブルの上にケーキの箱を置いて、その周りをみんなが囲んで「どれを食べようかなあ」と話して盛り上がっ

ていました。その時、パーソナリティの女性がふと気がつく、部屋の隅の方でアルバイトの娘さんが、ケーキの箱をくくっていた紐を、手でくるくると束ねて小さくまるめて、きゅっと結んでいたのだそうです。パーソナリティの女性は、「この娘は若い人なのに、こんなことがばつとできて感心だなあ」と思って眺めていましたら、娘さんは次に、ケーキの包み紙を手にとって、初めに紙の折じわを丁寧に伸ばして、それから紙の四隅をぴしっと合わせて、丁寧に畳んだのだそうです。その時に、他にもそのことに気づいたスタッフの人がいて、そのスタッフの人が娘さんに、「あんた若いのに感心だね」と声をかけたのだそうです。そうしたらその娘さんは恥ずかしそうな顔をして、「うちのおばあちゃんが、いつもこうしていましたから」と答えました。ラジオで放送されていたのは、そういう話でした。

年齢を重ねてきた人が、身につけてきた知識や技術には、世の中が変わってしまえば役に立たなくなってしまうものもあります。けれども、そういう知識や技術をとおして、大切にしてきた生き方ということは、時代を超えて大切な意味を持ち続けるものではないでしょうか。

亡くなった先祖に向かって、私たちを守ってくださいと祈る。そういうことがあります。けれども、どういうことを守ってもらいたいのでしょうか。消費生活どころでない、浪費生活をいつまでも



続けられることを守ってもらったら、一体どうなるのでしょうか。

今ご紹介したのは、おばあちゃんの知恵です。その知恵は、これからその孫娘さんを、物を粗末にする生き方から守ってくれることでしょう。そのおばあちゃんが、今も生きておられる方なのか、それとも、もう亡くなられている方なのか、それはわかりません。けれども、おばあちゃんが孫娘さんに守ってくれることがあるとしたら、お墓の中から守ってくれるのでもなく、あの世から守ってくれるのでもなく、今生きているその孫娘さんのいのちの中にあって、孫娘さんそのものになって守ってくれるのです。

ラジオの放送の中にあったことですが、亡き人を案ずる私が亡き人から案ぜられているということ、具体的な姿を教えてくださいのお話でした。

私自身になって、生きていらっしゃる

話は変わりますが、しばらく前の秋のお彼岸の時のことです。私がいるお寺では、春と秋のお彼岸に永代経という行事をお勤めしています。ある年の、秋のお彼岸の永代経の行事の時のことです。ご法話をしてくださった先生が、こういうことをおっしゃっていました。

その先生の地元の同級生の方で、お連れ合いさんが病気で亡くなられた方があったそうです。お葬式が勤められ、それから火葬に行かれ、火葬が終わってお骨を拾う段になった時のことです。喪主である夫がまずお骨を拾い、続いて小学生の娘さんたちが二人、お母さんのお骨を拾っていったそうです。その二人がお母さんのお骨を、竹のお箸で拾っているのを見ていたら、そのお箸の使い方が、とても綺麗で上手だったのだそうです。娘たちの、上手なお箸の使い方を見ていたら、そのお父さんは、「ああ、母さんがこの娘^にたちに、こんなに綺麗に上手にお箸を使うことを、教えてくれていったんだなあ」と思ったのだそうです。

そのお母さんは、亡くなったけれどもお母さんのいのちは、お母さんが教えた事柄という姿をとって、教えられた娘さんたちのいのちの中に生きている。それは、そのお母さんのいのちが、伝えられて受けとめられた娘さんたちの姿になって、生きているということなのでしょう。

私たちにとりましても、毎日の日常生活でしている、ありとあらゆることは、それを教えてくださった方があって、教えられて自分の身についてきたものです。私のことを案じてくださって、生きていくために大切なことを伝えてくださったいろいろな方があって、自分の身に伝わってきたものばかりです。



亡き人を案ずる私が亡き人から案ぜられている

私たちが、ご本尊に手を合わせて、お念仏を申して、ひと時を過ごすということがあるならば、そうしている私の中には、そのことを教えてくださった、伝えてくださった方々がいらつしやるということです。手を合わせて、南無阿弥陀仏と称えて、その方々に思いを致す時、その方々のいのちは、手を合わせている私自身になって、生きていらつしやる。それが、亡き人から案ぜられているということです。

案ぜられている私の発見

そのことで最近、なるほどなあと頷かされたお話があります。それは、多くの方がご存じだと思いますが、『鬼滅の刃^{きめつ やいば}』という漫画の物語です。この物語は、近年、少年向けの漫画雑誌に掲載されたものですが、アニメ映画になって爆発的なヒットになり、社会現象と言ってもよいほどの人気を得た作品です。この作品は、大正時代を背景にして、人食い鬼が存在する世界が描かれています。山の中で、炭焼きをして家族と暮らしていた主人公、炭治郎^{たんじろう}少年の家族は、ある日鬼に襲われて殺されてしまいます。ただ一人、かろうじて生き残っていた妹の禰豆子^{ねずこ}も、鬼の血を浴びて半ば鬼になりかけていました。その妹を人間に戻すために、炭治郎は旅に出て、剣術の修行に励み、やがて鬼を討つため

に組織された鬼殺隊きさつたいに入隊します。鬼殺隊で出会った仲間たちと力を合わせて、鬼を退治していくという物語です。

炭治郎や鬼殺隊によって殺される鬼たちは、息を引きとる間際になって、かつて自分を鬼に追いやった、苦しく悲しい人生の経験を思い出します。そして鬼たちが、今際いまわの際きわに思い出すのは、自分がかつて誰かの優しさによって支えられていた記憶です。炭治郎は、残虐な鬼たちを憎み、怒り、それを殺すことに自らのいのちをかけます。

けれども、いのちを終えようとしている鬼たちが抱えている悲しみや苦しみに、その一瞬、寄り添うところを持つている人物として描かれています。そのような炭治郎のところにふれて、鬼たちは大切なことを思い出すのです。

それは、案じられていた記憶であり、案ぜられている私の発見ということなのです。

思いが行き詰まってところが折れて、たやすく鬼になってしまうのは、大正時代のフィクションの世界のことばかりではありません。今を生きている私たちも、実はたやすく鬼になってしまいかねないところを、生きているのではないのでしょうか。この物語が爆発的なヒットになっているのは、炭治郎たちがその強さの底に持っている、優しさがあるからではないかと思います。鬼にならざるを得な



亡き人を案ずる私が亡き人から案ぜられている

かった人間の、悲しき、苦しさに対して、共感するところがあるのです。許さなくても見捨てられないというところが、現代を生きるたくさんの人びとの共感を得ているのではないかと思います。

真宗大谷派は、二〇二三年に宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要をお迎えします。その法要のテーマとして掲げられているのは、「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」という言葉です。人と生まれたことの意味をたずねていくと、何が分かるのでしょうか。何にたずねあたるのでしょうか。それは、案ぜられている私ではないでしょうか。亡き人を案ずる私が亡き人から案ぜられているということは、案ぜられている私であることを見失わずに、たとえ悲しみや苦しみに出あうことがあっても、それを受けとめ、立ち上がって生きてもらいたい、そういう願いがはたっていることを伝えていきます。

「亡き人を案ずる私が亡き人から案ぜられている」ということでお話を聞いていただきました。

南無阿弥陀仏

たましいの回復

大谷大学准教授 マイケル コンウェイ



法話の動画はこちら↓



南無阿弥陀仏の教えに出遇って

大谷大学からやって参りました、マイケル コンウェイと申します。今回は、法話の共通テーマとしまして、「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」というテーマが掲げられています。このテーマは、宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要のテーマでもあります。

この共通テーマにちなんで、自分自身の課題、自分自身の学びの中から、講題を提示することになっていきますので、この慶讃法要のテーマに応答するような形で「たましいの回復」という題を掲げさせていただきます。

少しばかり自己紹介をさせていただきます。私は二十年ほど前に故郷のシカゴで人生に躓いて、人



生の苦悩の中でその解決の糸口を求めて、真宗のお寺、東本願寺と関係のあるお寺にお参りしたわけです。そこで、南無阿弥陀仏の教えを聞いて、深く感動して、真宗を学ぶようになりました。それを受けて、シカゴでは五、六年学ばせていただいた上で、十七年前に京都へやって来て大谷大学でお世話になり、そこから今日まで大谷大学で念仏の教えを、さまざまな先生方や法友と共に学んでいます。

人間の自己中心的なところ

今日、題に掲げさせていただいた、この「たましいの回復」と申しますのは、実はアメリカの大統領選挙の中で、バイデン氏がトランプ氏に立ち向かう時に掲げた、選挙のスローガンから取った言葉です。トランプ氏の自己中心性は、おそらく皆さんも何度も見て、ぞっとしているかと思います。そのトランプ政権のもとで、アメリカ社会に分断と対立が増していきました。トランプ氏の支持者と、彼の生き方、政治手法に問題を感じている人たちとの間に、物凄い対立が生まれて、その方々の間ではいがみ合いがここ四年間アメリカで続けられました。ある意味でいがみ合いの根っこにある問題を、バイデン氏は的確にこの言葉で表現していると感じます。

この「たましい」という言葉は、我々現代人にとってはなかなか使いにくい言葉ですね。何か迷信のような、もう本当はないようなものというふうに感じます。私たちはこの存在は疑わなくても、たましいの存在は疑わしいものだと思うのです。しかし、そのあり方をよく分析してみると、人間の体を解剖したところでたましいもころもいずれも出てこないですよ。ですから私たちが、なぜころが絶対的にあるものだと感じて、たましいはないものだと感じるのか、実は大きな疑問を感じるべきことかと思われます。

私たちの祖先が、人類のほとんどの歴史をとおして、人間にはたましいがある、人間のたましいは大事だと言われてきているわけです。ここ二百年ほど、ヨーロッパを始めとしてそういう人間のたましいが疑わしい、信用ならないものだ、人間のころが信用になるのだというふうに考えられてきているわけです。

そういう発想の仕方が世界中に浸透して、第二次世界大戦後の日本で主流となり、特に二十一世紀に入ってから全世界は、ある意味でたましいを見失って完全に人間の利己主義、自己中心的なころ、私たちの理性を中心とした社会を築いています。私たち人間が自分の利益をどこまでも追求していく存在以外に何もないとされ、そしてそういうような自己中心的なころを唯一のよりどころとし



てほぼ全人類が生きているように見受けられます。

二十世紀に入った頃には、科学的技術の進歩によって、二十一世紀の生活は如何にも豊かで、もう誰も仕事もせずに、本当に科学の恩恵を受けて豊かに暮らせるというふう到我々の祖先が夢見ていたのです。けれども、この二十一世紀に入って私たちの現実を見ると、もうほぼ全ての人びとが生活を つなぐために疲弊する以外にないのです。何か経済を回すために私たちの社会が構成されて、または我々の利己主義というものを中心に社会が回るべきだと考えられ、経済学者などに言わせれば、私たちの現在の社会における中心理念が、私たち人間の自己中心的な欲求を追求する以外に何もないのだというのです。そのような乏しい形で人間の全体が考えられていますし、人間はそうあるべきだと考えられています。そういう誤った人間観の最たる象徴がトランプ氏だと思います。トランプ氏が本当に自己中心性極まりない、自分の利益しか見ない、その利益をどこまでもどこまでも追求していくというような生き方をしています。

我々のところ

どんな手段を講じてでも自分の欲求、自分の思いを通そうとする。実は我々のところにも、そう

いうトランプ氏のようなあり方が大いに含まれていますよね。正直に自分たちの生活を見てみれば、我々の中でもトランプ氏的な要素があると言わざるを得ない。本当に思いどおりになってほしい。周りの人、職場の人、家族の人、みんな自分の思うようにさせたい、自分の思うように働かせたい。それが思うようにならない時は怒り、叱り、大声を出して癇癪かんしゃくを起こす。トランプ氏と同じように、私たちのころもずっと癇癪かんしゃくを起こしているわけです。

そこでバイデン氏が、アメリカにも「たましいの回復」が必要だと、トランプ氏に対抗していったのですが、私たちにも、そういう私たちの利己主義に振り回され、自己中心的な欲求を中心に据えた生き方において、私たちの「たましいの回復」が不可欠だと考えます。

たましいの叫び

実際に人間の歴史を通じて、人間は利己主義以上のものを持っているとされてきました。そういう利己主義を超えていくような精神、願いを持っていると、世界のさまざまな宗教は伝統的にずっと説いてきたわけです。人間の利己性を越えた、たましいの世界に入れというようなメッセージがさまざまな宗教的伝統にあります。



真宗大谷派の伝統においては、南無阿弥陀仏という言葉が、いわばたましいの回復を、私たちに呼びかけているものですね。ある先生から「南無阿弥陀仏ハ法蔵魂ゾ」という、曾我量深先生のお言葉の軸をいただきました。南無阿弥陀仏という言葉には、私たちが自己中心的な利己主義というものをさておいて、大きな願いに生きることを「南無」と表現しています。この南無というのは頭を下げる、頭を下げて付き従う、という意味があります。阿弥陀仏というのが智慧と慈悲です。人を慈しむところ、本当に人のために思うところ、または世界を本当にありのままに認める。そういうようなところ、そういうような物の見方に付き従うという意味がこの南無阿弥陀仏にあるわけですね。

南無阿弥陀仏は、そういう私たちのたましいの叫びです。私たちのたましいの叫びを聞きなさいというのが宗教的伝統の呼びかけです。たぶん、皆さん、ランプ氏を見る時に、不快だなと思うということがあると思います。自己中心主義極まりない人間の姿を見ると、私たちはどこか深いところで、嫌だと思う。それは人間じゃない、それは人間の在るべき姿じゃないと反応しますが、この反応が、私たちのたましいの叫びです。その叫びは南無阿弥陀仏のメッセージとして我々の祖先によって表現されてきました。人間が本当に深いところ、たましいのレベルで何を望んでいるのかということが、南無阿弥陀仏という言葉で言い現わされています。自分の自己中心的な欲求欲望ではなく、智慧

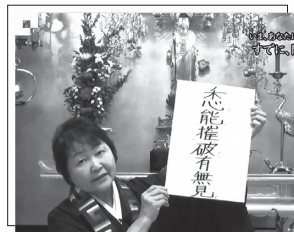
と慈悲をよりどころにし、それを自分の生きる指標にしたいというたましいの叫びは、私たちにそれぞれあるわけです。それを法蔵魂といいます。私たちが法蔵魂に目覚めて、その願いに沿って歩むということが、本当の人間としての人生を全うするために不可欠ですね。

私たちのこの世界を、本当に豊かなものにし、本当にありのままに認めていこうという人間の深いところにある願いに目覚めていこうというのが、南無阿弥陀仏であり法蔵魂であるということです。たぶん皆さんも、この社会の今のあり方がおかしいと考え、本当にギスギスして皆がいがみ合っていて、皆がもう自分のことばかりを優先してやっていこうとしているのが、何か動物化しているのではないかと感じているかと思います。皆さんが感じているそのことは、たましいの叫びです。そのたましいの叫びを、共にこれから聞いて、その指し示す方向に共に歩んでいけたら非常に有難いと思っています。

南無阿弥陀仏



すでに、開かれてあり



すでに、開かれてあり

法話の動画はこちら↓



金沢教区常讃寺副住職

ふじば
藤場

よしこ
芳子

本当にそれでいいのですか

「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」という慶讃テーマについて、今、私が考えていることをお話ししようと思います。そもそもテーマとは何でしょうか。小学校や中学校で新学期になるとクラス目標を立てます。たとえば「みんな仲良く協力しあおう」などです。なぜこういう目標を立てるかという点、みんなと仲良く協力できないからです。そういうことを考えると、「人と生まれたことの意味をたずねていこう」というテーマが掲げられたのは、それとは反対の私たちの日ぐらしがあるからではないでしょうか。

さて、私の住んでいるお寺の本堂に貼ってある、ある言葉を紹介したいと思います。「役に立たなくていいです。人は何かの役に立つために生まれてくるのではないのです」。これは祖父江文宏さん

の言葉です。祖父江さんは「暁学園」という児童養護学校の園長先生をしていた方です。

ある日、お寺に来ていた一人の女性が「この言葉を写していてもいいですか」と尋ねました。私は「もちろんいいですよ。でも、なぜですか」と言うと、彼女は「友達が仕事や人間関係が上手くいかず、自信をなくして、今、家にひきこもっているのです。この言葉を紹介したら、少しでも励みになるかと思って」ということでした。それから一、二週間経った時、彼女に「そのお友達の反応はどうでしたか」と尋ねました。「実は、書いた言葉を渡さなかったんです」と言うのです。「せっかく写していったのに、なぜですか」と尋ねると、

「人は役に立つために生まれてくるんじゃないかなったら、何のために生まれてきたのかと友達から尋ねられても、私には答えられないから」ということでした。そこまで考えて思いとどまったのかと驚き、正直な人だと思いました。でもそれと同時に、「答えがわからない」ということがそんなにも思いとどまらせることになるのだとも思いました。私たちが学校で習ったことといえば、正しい答えを出してマルをもらうということだったので、彼女がそう思ったのは無理もないかもしれません。私がこの言葉をお寺に貼ったのは、答えがわかったからではなく、私自身がドキッとさせられたからなのです。



すでに、開かれてあり

私たちの中には「役に立つこと」が絶対的な価値や常識としていつの間にか身についているのではないだろうか。それに対して「本当にそれでいいのですか」と真正面から問われた言葉として私の心に響いたのです。

自分のものさしを問う

「正信偈」の中に「しつうのうざいはうむけん悉能摧破有無見」という言葉があります。「ことごとく、よく有無の見を摧破せん」と読みます。有無の見とは役に立つとか立たないとか、できるとかできないという私たちのものの見方、常識的な考え方のことです。それを破ってくれるのが教えに出あうということです。私たちには「二者択一」の発想しかできません。役に立たなくなった自分を卑下したり、また逆に自分は役に立っていると思って自信満々になり、役に立たないと思う人を批判したり切り捨てたりしてしまいます。ある人から「自分のものさしで問うのではなく、自分のものさしを問うのが仏教です」という言葉を教えていただきました。ものさし「で」と、ものさし「を」では、たった一字の違いですが、百八十度ものの見方、考え方が変わってきます。それまで正しいと思っていた根拠そのものが問われるのです。

親鸞聖人は常識にとらわれている私たちに、そうではないのだということを蓮の華をたとえにして次のように語っておられます。現代語訳してみます。「高原の陸地には蓮の華は咲かない。低くてじめじめとしている泥だからこそ咲く」と。高原の陸地とは、人がうらやむような環境、順風満帆な人生と言えると思います。それに対して、泥とは煩惱のことです。病氣、老い、苦しみ、迷い、空しさなど一般的にはマイナスだと思われるものです。元々の文章は『維摩経』に書かれているのですが、それを引用する時に、親鸞聖人は「だからこそ」という独自の読み方をしています。つまり私たちが嫌だ、価値がないと思っているものこそ大事にしていこう、それこそが仏道につながっている道なのだとおっしゃっているのです。

縁によって見えてくること

さて、テレビや新聞で「コロナ禍」という言葉を、毎日見たり聞いたりするようになりました。「禍」という字はめったに使わない字なので辞書で調べてみました。訓読みで「わざわい」と読みますが、字の右側は骨のくぼんだ関節を表していて、意味は「思いがけない落とし穴」だそうです。つまり普段は目に見えないけれど、縁によって見えてくるということです。



すでに、開かれてあり

例えば、スーパーに行った人が、マスクをつけていないことに気づいて家に取りに帰ったと私に話してくれました。電車の中でたまたま咳き込んだのに、周りの人が離れていったという話も聞きました。最近では、「私は花粉症です」というバツジまで生産されていると聞いてびっくりしました。県外ナンバーの車には、「出て行け」と張り紙をする人もいます。政府の要請に従わない人たちに対して、監視したり、攻撃したりする気持ちが私たちの中にあることが表面にあらわれたのです。

私自身のことでは、自粛期間中に家中の片付けをして、たくさんゴミを出しました。私のような人がたくさんいたようで、ゴミ収集車に入りきれない状態になったそうです。ゴミ収集の仕事など、私たちの生活に必要な仕事をする人を、エッセンシャルワーカーということをして、今初めて知りました。無くてはならない仕事なのに賃金が安い。そんなことを全く考えずに、当たり前ゴミを出して、家の中が片付いたと喜んでいる自分が恥ずかしくなりました。雇い止めされた人の中には、非正規雇用の女性が多く、自殺者が去年より増えているそうです。男女平等とはほど遠い現実です。コロナ禍によって見えていなかったこと、見ようとしていなかったこと、人と人との分断と格差が突きつけられた思いがしました。

そんなことを考えていたある日、東京に住んでいる人とたまたま電話で話すことができました。突

然だったのですが、彼女に「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」という言葉聞いてどう思うかと尋ねてみました。すると「たずねていこう」と呼びかけられているからには、その場所はどこにあるのだろうと思った。英語で言えば「Let's go」、みたいに誘われている気がした。もし、たずねていくと断定的に言われたら、一人でたずねていくことになるけれど、たずねていこうはみんなで一緒にと呼びかけられているようで嬉しかった」という返事でした。空間的な「密」を避けるようにと言われている今だからこそ、私たちは精神的な「密」を求めている、人をつながっていたいという思いが強くなっているのではないかと思いました。

ただ念仏

新型コロナウイルスの感染力は話題になりますが、お念仏の感染力はどうでしょうか。感染という言葉はふさわしくないかもしれませんが。でもあえて今、使うとするならば、二五〇〇年も前から途切れずに伝わってきた感染力はすごいと思うのです。

「ただ念仏」するだけなので、世間ではそれがすごい感染力をもつとは思われていませんが、誰一人見捨てない、という阿弥陀さまの願いが人から人へ声となって伝わり、聞いた人によってまた次の



すでに、開かれてあり

人に届けられてきました。いつでも、どこでも、誰にでも開かれています。「人と生まれたことの意味をたずねていこう」を考え続ける生き方が、南無阿弥陀仏によって始まります。

南無阿弥陀仏

教学研究所が発行する月刊聞法紙『ともしび』

今回は2021年5月号の一部をご紹介します。

池田勇諦（同朋大学名誉教授）

どのような阿弥陀仏に
遇っているのか

第三に、感染症の拡大という現在の
厳しい状況下で、私たちは本当に日ご
ろの聞法の在り方が問い返されていま
す。つまり信心が問われるということ
です。その中身を言えば、あなたはど
んなほとけに遇っているのですか、と



問われているのです。「阿弥陀さん、
阿弥陀さん」と気安く言うけれども、
どのような阿弥陀さんに遇っていらっ
しゃるのですかと、この厳しい現実か
ら、私たち一人ひとりが問われている
のではないのでしょうか。

こだわって恐縮ですけども、阿弥
陀仏を信ずる対象だと思っている限



り、そこにとどめている限り、私たちに本当の歩み、生活は始まらない。足が地に着かないのです。

今回の感染症のことも、天から降ってきたわけではないでしょう。人間がこしらえた文明が招来した現象ではないですか。自坊の伝道揭示板に、

コロナ感染症

拡げたのも人間

終息させるのも人間

人間は

人間の作った文明で

苦しむ

と書いたことですが、ならば、人間は受けて起つしかない。必然の出来事に向き合っていく姿勢。守るべきことは守る生活をです。

その意味で、今回の思いも寄らない厳しい感染症の状況が、私どもにとつては大変なご縁なのではないでしょうか。あなたは、どのような阿弥陀さんに遇っているのかと問われているご縁です。よくよく自問させていただきたいところです。

月刊聞法紙『ともしび』のご注文は東本願寺出版まで

✉ books@higashihonganji.or.jp FAX 075-371-9211 ☎ 075-371-9189

1部 130円（送料別）、年間購読料 1,500円（送料込）

詳しい書籍情報は

東本願寺出版

検索



真宗教化センター

しんらん交流館たより（第7号）

—いま、あなたに届けたい法話 Ⅲ

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

発行日 2021年6月1日

発行者 但馬 弘

発行所 真宗教化センター（しんらん交流館）

〒600-8164 京都市下京区諏訪町通六条下る上柳町199番地

T E L 075-371-9208（代表） F A X 075-371-6171

E-mail shinrankoryukan@higashihonganji.or.jp

しんらん交流館ホームページ（浄土真宗ドットインフォ）

<https://jodo-shinshu.info/>

浄土真宗ドットインフォ

検索

